資料渉猟余話 その15

西尾実のハガキと岩波国語辞典

吉澤　健

現在第七版を重ねる岩波国語辞典は、下伊那郡豊村帯川（現阿南町）出身の西尾実と岩淵悦太郎の編集で、第一版は一九六三（昭和三十八）年四月十日の発刊である。

この辞典の特徴は、単に言葉の意味を記すだけでなく「春」に例を取れば、英語では「スプリング」といい、これは別に「ばね」や「泉」の意味を持っている。このように「春」という言葉には地の底からわき出る水のように、またおさえつけてもはね返す力があるという意味を持っていることを説明に加えることを基本方針とした画期的な辞典であった。

蔵での整理・搬出作業風景

◇

南信州資料センター、通称「捨てないで」の活動は、いただいた資料が現在3万点を越えるので復本を二部まで確保し、それ以上のものは希望者に活用していただいたり、廃棄処分を実施しているが、その最終点検を立場上筆者が行っている。

過日、その作業中前料をいただいた矢高行路（東）で、ハガキの裏面に文章が記され、差出人は「西尾実」とあるので、改めて文章を読み返した。そこには次のように記されていた。

「思いながら御無沙汰してしまいました。岩波国語辞典について記した岩波の国語辞典があった。また辞典かと思いながら何気なくパラパラとページをめくっていると、はらりと一枚のハガキが落ちた。おやっと思い宛名を見ると「矢高行路様」とある。辞典の持ち主はかつて貴重な郷土資さっそくお用いくだされ御感想をお聞かせくだされありがとう存じます。言語生活につき鋭い反省と観察をお持ちになっていられるあなたからのおことば、感銘深く承りました。お励ましに応えたいと存じ一言御礼申し上げます。

五月三十一日

東京都杉並区和泉町八一五

西尾　実」

◇

このハガキの書かれた五月三十一日はハガキの消印スタンプに「38」とあるので、辞典が発刊された昭和三十八年である。

この年の四月に辞典が発刊され、矢高は早速購入し、使ってみて、その感想や気づいた点を編集者の西尾実に書き送ったのである。二人はかねてから相知る間柄であったことも文面から伺われるが、発刊後わずか一カ月半の間にこうしたことがやり取りされた速さに一驚させられる。

この頃の西尾実は持病の眼疾が進み、山下先生の口述筆記や代筆が多くなっていたが、文学博士号を受け、講演も多く多忙の時期でもあった。そうした中、このようなハガキを返した西尾の学者としての誠実さ、こまやかさを語る貴重な資料の一つではないかと思い一文を草した次第。

辞典のあと表紙裏に矢高は絵を描き、箴言を記され、ハガキをはさみ、愛用されていたことが推測される一冊であった。（文中敬称を略させていただきました）